移住者の声・市民の声

No60　ペンション山羊のオーナー新田さんご夫婦　　／　先輩移住者に聞く Vol.10「須坂市峰の原高原ペンションオーナー」

みなさんこんにちは。このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどういうものか、須坂のいいところ、苦労しているところを聞いていくコーナーです。
今回は須坂市峰の原高原地区のペンションのひとつ、ペンション山羊のオーナーである新田克己・敦子さんにお話をお伺いしました。
◆ご夫婦で昭和59年に東京から移住

●ペンションオーナーになったきっかけ
新卒で企業に入社した時にちょうど日本で初めてペンションというものができた時代でした。
会社でサラリーマンをしていくなかで、それに憧れて自分は日本的な民宿風ではなくて、洋風のパータンの民宿をやりたいと考えていました。それが一番のきっかけです。
そして、なぜ峰の原高原を選んだのかというと、当時、開発会社の人に色々な場所を紹介され、例えば東北地方だったり長野県内だったり、峰の原高原もその一つだったのです。
その中でも峰の原高原は他に比べ、東京からのアクセスが良かったのと値段が安かったのとで始めやすかったのです。

●須坂・峰の原高原で生活して良かったこと、苦労したこと
私たちが峰の原高原に来た昭和50年代後半は、原が開発され始めて10年もたたない頃でした。
その時は庭に大きな石があったりして、ペンションの周りを整備することから始めないといけませんでした。さらに木も今より茂ってないので笹ばっかりの場所でした。
また、最初のうち知名度もあまりないのでお客さんが予想よりも来ないということがあり、当時の風潮としてペンションに憧れというものはありましたが、現実はお客さんが来ない日のほうが長かったです。
やることはたくさんあるのですが、お金が発生しないので大変でしたね。しかし、生活し

ていく中で、この峰の原高原の良さというものが分かってきました。
特に子どもができてから実感しました。病院は遠いところにありますが、隣接する上田市の菅平高原地区には保育園から中学校までありますので越境通学で通わせることができ、山の上にある他のリゾート地よりも子育ては充実しています。
夏は涼しくて最高に良いです。サラリーマン時代とは違い仕事にメリハリがつけられるのもいいと思います

●須坂市・地域おこし協力隊への提案
まず、お客さんを呼ぶことによりここが潤います。そこを工夫してもらいたいです。
例えば冬だけではなく夏もスキー場を活用するなどシーズンを通して峰の原高原に滞在してもらえるようにして欲しいです。それには、ペンションに活気を取り戻してほしいです。
昔あった縁日なんかも復活すると面白いかもしれないです。さらに中高年以上の趣味のイベントが多いので、もっと若い人に来てペンションに泊まってもらえるようなイベントを企画してもらいたいです。

●移住を希望する方へ「昔取った杵柄ではダメ」
まず「昔自分は○○だったから」という考えは捨ててください。というのも同じ業種ならよいのですが、普通皆さんはペンション経営においては初心者です。
スタートラインは同じなのです。今までの生活をそのまま持ってくると失敗します。
そして、峰の原高原はおおらかな部分もあるので、あんまり神経質にならないことがここで生活していくことだと思います。

ペンション山羊
http://yagi.travel.coocan.jp/
〒386-2211長野県須坂市峰の原高原3153-696
TEL0268-74-2337

（須坂市地域おこし協力隊　斉藤祐哉）

No61　祖父の果樹園を継ぐことを提案　　／　須坂市で頑張る新規就農者を支える家族Vol.10

◆湯野澤さゆりさん
2017年３月に東京都板橋区から夫と移住

東京で高齢者向けの運動指導の仕事をしながら充実した都会暮らしを送っていたさゆりさんとご主人の宏健さんが、須坂への移住・就農へと至ったのは、須坂で農業を営むさゆりさんのおじいさんの跡を継ぐためでした。
外孫のうえ既に嫁いでいたさゆりさんとご主人である宏健さんに降ってわいたような果樹農家の跡つぎ問題は、蓋をあければとんとん拍子に話が進み、お二人が須坂に引っ越しきたのは2017年の3月。須坂での暮らしや楽しみ方など、いろいろ模索中のさゆりさんにお話しを伺いました。

●夫が農業を目指すまで
私の母の実家が須坂で果樹農家なのですが、農業を切り盛りしていた祖父が３年ほど前に体調を崩し入退院を繰り返すようになりました。そのような状況になり表面化したのは祖父の農園の後継ぎ問題。そこで、夫に祖父の果樹園を継ぐことを提案してみたのがきっかけです。
夫は秋田県の兼業農家出身のため農業に寛容で、また彼は大学時代に冬は白馬でロッジを手伝いながらウインタースポーツを楽しむために毎年長期滞在をしていた経験もあり、長野県に住むことにも好意的でした。夫の両親も彼が私の祖父の果樹園を継ぐことに賛成してくれたこともあり、とんとん拍子に話が進んで、2017年の3月に須坂に引っ越してきました。
夫が果樹園を継ぐことになり、祖父は「後継ぎに農業を教え込むまで元気にやらないと！」と周りの方にも言っているそうです。たしかに入退院を繰り返していた頃から見るとだいぶ元気になり、生きがいのように感じてくれているようです。そんな祖父の様子を見られるのも嬉しいことです。

●須坂で生活してみて
まだ引っ越してきて10か月ほどなので、須坂暮らしは手さぐり状態ですが、あえて挙げると、都会と地方はお金や時間の「使い方」が違うと感じます。
「地方暮らしはお金がかからない」というイメージを持たれている方が多いと思うのですが、例えば地方は車が必須であるとか、都会では考えることのなかった思わぬ出費があったり、移動などで時間がかかったりすることもあります。移住を考えている方は、その地域についてよく調べてこられることをおすすめします。
良い点を挙げると、都会に比べて自然が豊かなことと、食べ物がおいしいということに関しては、間違いありませんね。

ご主人の宏健さんは、さゆりさんのおじいさんと共に果樹園で働きながら農作業、農業経営を学んでいます。当面の目標は農園の規模拡大。稼げる農業のスタイルを探っています。また、仕事だけでなく、須坂を拠点にアウトドアで遊べる場所を探したりして、信州須坂暮らしを前向きに楽しんでいるようです。
一方、このインタビューの時点で、さゆりさんは初めての出産の予定を２週間後に控えていらっしゃいました。今年の春に移住してきてから間もなくして妊娠し、農業に挑戦する

ご主人を見守りつつ日々変化していく自分の体調と向き合いながら過ごしたこの10か月は、心細さや不安も覚えたことでしょう。充実していた東京暮らしのことや東京にいる親しい人たちの顔を思い出しては、淋しさを感じることも多かったといいます。
しかしその淋しさは移住者にとっては特別なことではなく、誰もが心に抱えているもの。淋しいと思うからこそ、会いたい、会いに行くね、と、交流が生まれるのではないでしょうか。
さゆりさんと宏健さんの須坂内外に繋がるたくさんのご縁が花開く日が楽しみです。

須坂市地域おこし協力隊　　田島和恵

No62　ペンションふくなが福永一美さん　／　先輩移住者に聞くVol.11「須坂市峰の原高原ペンションオーナー」

みなさんこんにちは。このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどういうものか、須坂のいいところ、苦労しているところを聞いていくコーナーです。
今回は須坂市峰の原高原地区のペンションのひとつ、ペンションふくながのオーナー福永一美さんにお話をお伺いしました。
◆1972年12月に兵庫県宝塚市から移住

●ペンションオーナーになったきっかけ
私の両親がペンションをはじめるということで一緒についてきたというのがきっかけです。
ですので、峰の原高原に引っ越してきた日が初めて峰の原高原に来た日です。
両親は見ず知らずの田舎に引っ越すときは、周りがみんな移住者のところに引っ越した方がしがらみもなく、しかも、いきなり集落に入ると慣れるまで時間がかかるということも

あり難しいと考えたみたいです。それならば一から新しい集落を作った方が都会から移住してもハードルが低いのではないかと思ったらしいです。
当時、信州で何件かペンションヴィレッジが開発されていた中で、比較的市街地に近く、スキー場にも近く、さらに東京からも簡単に来られる峰の原高原を選びました。

●須坂・峰の原高原で生活して良かったこと、苦労したこと
みんな気楽だったことです。私たちは先住者だったので、郵便も新聞も配達に来ない、電話もひけない、ごみも収集に来ないような状態だったので大変でした。
しかし、それはうちだけではなく、ここに住むみんなが大変だったので、協力しながら努力してきたので一から作る楽しさ、今でいうベンチャー企業のような楽しさというものがありました。
ただ自分たちの作ったところではのびのび暮らしていましたが、一歩外に出ると昔からある地域なので、そこでいろいろなしがらみがあり、わからないところがたくさんありました。
しかしながら、今でも峰の原高原にはそんな気楽さ、住みやすさがあります。寒さとかインフラ的なものは覚悟してここに住んでいるので気にはなりません。
今の年齢でここに来たならば、今までの都会の暮らしがあったから馴染まなかったかもしれませんが、20代で来ているので、何とかなりました。
若い時に来て、いくらでも失敗して、やりなおすことができるというのも気楽にできた理由なのかもしれません。

●須坂市・地域おこし協力隊への提案
もっとアウトドアやアクティブに活動して欲しいです。また、もっと社会経験を積んでくればもっと簡単にできるのかなと思います。そのように使われるのに慣れていればもっと頼めるのかなと思います。
また、須坂市には、行政が民間の代わりに何かをするのではなく民間がやりたいといったことを手伝ってほしいというか、頭ごなしに否定するのではなく話をきちんと聞いて協力してほしいと思います。

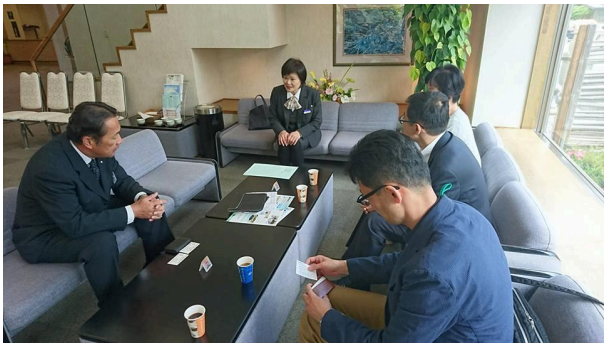
●移住を希望する方へ「気楽に楽しむ」
肩の力を抜いて、楽しんでください。無理をして、ああしようこうしようとするのではなく、移住もとりあえずやってみるかくらいの気軽な気持ちで望むと長続きするのではないかと思います。

移住への期待が大きすぎると、期待と現実のギャップが大きくなってしまい挫折してしまうかもしれません。峰の原高原は気楽なところですので気楽にきてください。

ペンションふくなが
http://www.tim.hi-ho.ne.jp/kfukunaga/
〒386-2211　長野県須坂市峰の原高原
TEL 0268-74-2729

須坂市地域おこし協力隊　斉藤祐哉

移住支援信州須坂モデルが番組になりました！　／　【YouTube視聴できます】須坂市へ移住した方の体験談を動画で紹介します



『共創』～皆でつくろう元気なすざか「移住支援信州須坂モデルとは？」
※2018年１月須高ケーブルテレビで放送されました。

東京で暮らしていたご夫妻が「須坂モデル」を利用し移住に至るまでをインタビューでご紹介しています。
★番組は、こちらをご覧ください（YouTube）★
https://www.youtube.com/watch?v=d7DQQe9nHqA

No63　夫の夢だった農家が私の夢にもなりました　／　須坂市で頑張る新規就農者を支える家族Vol.11

◆中井江里子さん
2016年3月に大阪府岸和田市から移住
本人、夫、長女（小３）、長男（小１）の４人家族

今回お話しを伺ったのは、大阪府岸和田市から移住された中井江里子さんです。
ご主人の竜佑さんが農家になることを目指したことがきっかけで、須坂市に移住されました。
就農するための条件から選んだ須坂市でしたが、暮らし始めてみると、予想外の楽しさや喜びが待っていました。

●農業を目指し、家族４人で移住するまで
夫が農業を目指すことになり家族で須坂市に移住したのはおよそ２年前です。
しかしそのずっと前、長女が生まれたくらいの頃にも夫は農業を目指したいと言っていました。
しかしその時の私には就農することはとてつもない冒険に見え、賛成することができませんでした。
転機となったのは今から３年ほど前でしょうか。ある時、夫が脱サラぶどう農家の方が紹介されている本に出会い深く感銘を受けて、ぶどう農家になることを決意しました。
夫が農家になることを10年も思い続けていたことを知り、今度は私も彼の夢の実現のために応援することにしました。

●どうして須坂を選んだのか
最初は地元の大阪で就農するつもりだったのですが、いざ調べてみると、大阪では土地が見つからず、あったとしても買うにも借りるにも土地代が高い。
また、苗木を植えることから始めなくてはならないなど、ぶどうの栽培を始めるには厳し

い状況であることがわかってきました。
そこで「ぶどうの産地」に目を向け調べてみたところ、いくつかの候補地とともに長野県須坂市を見つけました。
思い切って市の農林課に電話をかけ新規就農について話を聞いてみるととても親切に対応してくださいました。
また、他の候補地では研修期間が３年かかるところ、須坂市での就農研修は２年だったので、早く独立したい自分たちに合っていると思い、須坂市での就農・移住を決めました。

江里子さんの大阪のお友達からの応援ツナギを着て

●須坂で生活して良かったこと
地域の人がとても親切で温かいです。
移住者である私たち一家と初めから気さくにお付き合いしてくださいました。
しかもそれが大人だけのことではなく、地域の子どもたちも物怖じせず人懐こく思いやりがあります。
子どもの数が少ないからでしょうか、地域の子どもさんが学年に関係なく我が子と仲良くなってくれて、小学生だった長女は転校したその日から地元の年長のお子さんが気にかけてくれ、可愛がってもらいました。
そんな地域のみなさんのおかげで私たち一家もすぐに馴染むことができました。
また、多くの方が野菜も作っているので、新鮮なおすそ分けをいただけるのがとてもありがたいです。
“おすそ分け”という言葉には似つかわしくないくらいたくさんいただけるので、お料理をするにも「大量消費」というワードでのレシピ検索をするようになりました。（笑）

●取材を終えて

現在小学３年生の娘さんは、課外授業でぶどう農家さんを訪れて農作業の体験をしたことがきっかけで、今ではぶどう栽培にとても強い関心をもっているそうです。
将来の夢はぶどう農家になることだそうで、自ら栽培方法を調べているとか。
また、大阪にいる頃同居していたご主人のご両親も将来的には須坂に呼び寄せ、また三世代家族で仲良く暮らしたいとも語っていました。
10年前は竜佑さん一人の夢だった「農家になる」ことは、いつしか竜佑さんを支える江里子さんの夢にもなりました。
３年前に大阪に住んでいたときに鉢で育て始めたシャインマスカットは、まるで一家のシンボルツリーのように、ここ須坂で根をおろし、一家の夢と子どもたちと共に、すくすくと育っています。

一家の夢と共に育つシャインマスカット

（須坂市地域おこし協力隊　　田島和恵）

No64　「心身ともに健康で豊かな暮らし」を目指して　／　須坂市で頑張る新規就農者を支える家族Vol.12

◆田中久子さん
2015年２月に埼玉県上尾市から移住
本人、夫、子ども３人（中２、小４、１歳半）の５人家族

須坂市豊丘上町。五味池破風高原への林道へ続く集落の一番上に一軒の古民家があります。
来訪者には元気な犬たちが賑やかにお出迎え。
建物の奥に目をやればヤギたちがのどかに草を食んでいる。
住宅横の作業場兼直売所では、ぶどうなどの農産物のほか、こちらで飼われている鶏たちが産んだ卵やヤギミルク石鹸などが季節により売られています。
今回は、「自然豊かなところで丁寧な暮らしがしたくて」移住したという田中久子さんにお話しを伺いました。

１月に産まれたばかりの子ヤギ

●移住、農業を目指すまで
以前は、夫は造園業、私はヨガやピラティスのインストラクターをしていました。
仕事として生徒の皆さんが心身を健やかに保つお手伝いはもちろんのこと、自分たち家族にとっても「心身ともに健康で豊かな暮らし」を目指していました。
数年前から家族の楽しみとしてキャンプに出掛けるようになってからは、山遊びの楽しさや、開放感、新鮮な空気にすっかり魅せられ、それらは私たち家族にとって都会暮らしの便利さよりも代えがたいものになっていきました。
山で過ごす時間は心躍る楽しみもゆったりとした安らぎも与えてくれる。「山に帰りたい！」「山に住みたい！」、そんな想いが募るばかり。
都会の良さもわかるけれど、それはもうおなかいっぱい味わったから、これからは自然が豊かなところで暮らしたい。いっそ、田舎暮らしを始めてしまおう！と、具体的に動き始めました。

●どうして須坂を選んだのか
田舎暮らしを始めるにあたり、まず解決しなければならないのは「住居」と「仕事」です。
「住居」については、まずはインターネットで物件情報を収集、検討しました。
目についた物件をいくつか内覧してみると住むには問題も多く、家探しだけでなく田舎暮らしの実現のむずかしさを感じ始めたころ、現在住んでいる古民家を見つけました。
私たちの希望する条件にも合致し、まさに一目惚れでした。
家探しと同時にどうやって生計を立てていくか、田舎での「仕事」を模索するなかで、農業をひとつの選択肢と考えていたのですが、一目惚れした古民家物件のある須坂市では農業を志すひとのために里親研修制度があることを知り、自分たちが田舎暮らしを始めるにあたり理想的な状況、引き寄せられたかのようなめぐり合わせの縁を感じ、須坂への移住と同時に夫婦で就農することを決意しました。

●須坂で生活して良かったこと、苦労したこと、須坂市への提言、移住者希望者へメッセージ
須坂は豪雪地帯ではなく、「雪は降っても一晩で膝の高さ程度」と聞いていたので、寒さも厳しくないかも、と思っていたら大間違い。信州では雪の量が少ないからといって温かいわけではないのです。
さらに我が家は築100年近い古民家、断熱材や二重窓などの寒さ対策リフォームは充分に

施したつもりでしたが、それにもかかわらずどこからともなく隙間風が吹きこんできました。
最初に迎えた冬は予想を超える寒さに相当参りましたが、今では業務用ストーブを備えたり、寒ければたくさん着込めばいいことだと気づき、寒さにもだいぶ慣れてきました。
大好きな山が身近にあり、自然豊かな環境で、子どもたちものびのびと育っています。
しかし、須坂市は経済的な子育て支援は他の地域より厚くはなく、移住してから子育てにかかる家計の支出が増えたのは事実です。
少子化対策を重要視されている地域では、たとえ限界集落といわれているような地域でもあっても、子育てに対し経済的な支援が厚いところもあり、地域全体で子育て世代を応援していて子どもを産み育てやすい社会環境を整えているように感じます。
須坂市はまだ人口減少や過疎といった問題は切実ではないのかもしれませんが、現役世代が子供を産み育てたくなる制度を整えてもらえたらと願います。
寒さがつらいとか、子育て支援が厚くないとか挙げましたが、決してネガティブなメッセージではありません。不便な点を認識しほかの人と共有することは、暮らしをより良いものとしていく小さな一歩だと思うのです。
私は心から、ここに移住して良かったと思っているし、ここでの暮らしを楽しんでいます。

●インタビューを終えて
目指したのは「自然豊かな地で心身ともに健やかに丁寧な暮らし」。その実現のために歩んでいたら結果として田舎暮らしや就農へと繋がりました。
ご主人の哲さんは古民家のリフォームを始め鶏小屋にヤギ小屋を自らの手で作り上げます。
卵のおすそ分けをもらうために飼い始めた鶏は、久子さんが心をこめて世話をし、ここで産まれた卵を孵化させ育てた鶏も含め現在では全部で50羽を超えるほどになりました。
久子さんの愛情を感じているのか、手のひらに卵を産み落とすほどに懐いています。
久子さんの次の夢は、自分たちが育てたりんごやぶどう、卵を使ったスイーツを提供できるカフェを営むこと。
そこではきっと、“心温まる、手作りの丁寧な暮らし”を私たちも感じることができるのではないでしょうか。楽しみでなりません。

引っ越してきた頃から育てている鶏たち

「食べる漢方薬」とも言われる烏骨鶏

【信州須坂 田中果樹園】
Address 須坂市大字豊丘1878
Tel 026-247-8917 / 090-1763-2526
Email Suponjibob1120@gmail.com

★久子さんが愛情こめて育てている田中果樹園さんの産みたて卵は、
　Ａコープすこう店 生産者直売コーナーでも販売されています。

（須坂市地域おこし協力隊　　田島和恵）

No65　ペンションマウンテンパパのオーナー池上晶光さん　／　先輩移住者に聞くVol.12「須坂市峰の原高原ペンションオーナー」

みなさんこんにちは。このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどういうものか、須坂のいいところ、苦労しているところを聞いていくコーナーです。
今回は須坂市峰の原高原地区のペンションのひとつ、ペンションマウンテンパパの池上晶光さんにお話をお伺いしました。
◆1987年に東京都から移住

●ペンションオーナーになったきっかけ
ペンションオーナーになる前は会社員をしていました。
都会で生活しているうちに、たまたま夫婦２人で自然の中で住んでみたいということで意見が一致したことが最初のきっかけでした。
それから自然のことなどいろいろ勉強していくうちに、自然が好きだけでは生活が成り立ちません。
かといって、林業や動物の関係の仕事をするといっても、専門の知識は全くないので、そのような仕事に就くことはできませんでした。
そこで生活を成り立たせる一つの仕事として専門的な知識はあまり必要ないペンション経営もありだと思い、ペンションを勉強し全国をまわっていました。
たまたま前のオーナーさんが年配で退くということを開発会社から聞き、実際来てみて気に入ったので峰の原高原に決めました。

●須坂・峰の原高原で生活して良かったこと、苦労したこと
やはり夏が涼しく、水がうまいというのが第一です。
また生活面では上田市(旧真田町)との協力で、近くの菅平小・中学校に子どもたちを通学させられたことが一番でした。
大自然の中といっても子育ての面は充実しています。
地方の生活を調べてみると、やはりバスで一時間かけて下界に降りて学校に通わなければならないというところも多いと聞きます。
ちょっとした田舎でも自転車で30、40分かけて通うとか、電車で一時間かけて通うとかがざらにあります。
峰の原高原では田舎でも中学までは近くにあり子どもをゆっくり育てられるいい場所だということです。
意外にここは大自然といっても車で30、40分ほどかけると長野市や上田市に行けるので生活するのに不便を感じることは少ないと思います。

ただ、冬が寒いので、環境的に年をとっていくほどつらくなったり、下で暮らすよりもお金がかかってしまうので金銭面で苦労したりすることは否めないですね。

●須坂市・地域おこし協力隊への提案
生活する面では好きでここに住んでいるので文句は全くないのですが、これから来る移住者の方々に空きペンションがあったり、増えたりするとちょっとどうかなあと思います。
ここはペンション経営で生活が成り立つ場所です。どんどん若い人が移住してきて循環できる環境ではありません。
担い手が育つ環境を作って、空きペンションを少なくしてもらいたいです。
先ずは、夏が涼しい水がおいしいでやって来ても良いと思いますが、そこから「ここに住み続けたい」に繋げてほしいです。

●移住を希望する方へ
自然を楽しんでください。水や空気はおいしい、病院も想像よりも近い、街中にも近い、行政もしっかりしている、子育てにも優しいと他の田舎と比べてみても便利だと思います。
ほかのところだと新幹線の駅に行くにも何時間もかかったりしますが、峰の原高原は１時間弱で上田駅に行くことができます。
そういう面では意外と自然といえないかもしれないです。
夏は涼しく過ごし、冬はウィンタースポーツを楽しむという生活も楽しいかもしれません。

ペンションマウンテンパパ
https://www.mtpapa.jp/
〒386-2211
長野県須坂市仁礼峰の原3153-720
電話0268-74-2730　FAX0268-75-2127

（須坂市地域おこし協力隊　斉藤祐哉）

No66　ペンション ファンタイムのオーナー鷲巣正幸さん　／　先輩移住者に聞くVol.13「須坂市峰の原高原ペンションオーナー」

みなさんこんにちは。このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどういうものか、須坂のいいところ、苦労しているところを聞いていくコーナーです。
今回は須坂市峰の原高原地区のペンションのひとつ、ペンションファンタイムのオーナー、鷲巣正幸さんにお話をお伺いしました。
◆1993年10月に静岡県から移住

●ペンションオーナーになったきっかけ
もともとサラリーマン生活をしていた頃、その生活に嫌気というか辛く感じていました。
ちょうどその頃、峰の原高原のペンションにお客さんとして泊まりに来ていました。
夜、オーナーさんに仕事の悩みを相談したりしていました。
そんな時、オーナーさんが病気になってしまい、高齢だったこともあり「あんたたちここをやってみないか」と言われました。それなら是非やりたいと思い、はじめたのがきっかけですね。
ですから、ペンションオーナーになりたくて峰の原高原に来たとか、親がペンションオーナーをしていてそれを継いだからとかではなく、偶然、転職をしたいなと思ったときにペンションオーナーの話があったというのが、他のオーナーさんとは違うのかなと思います。

●峰の原高原で生活して良かったこと、苦労したこと
冬は寒いですが自然環境がとても良いです。また、村の雰囲気もガツガツしていないのでのんびり生活することができます。
四季を身近に感じることができ老後をのんびり過ごすには良い環境だと思います。
自然が好きな人はここで好きな仕事をすることができれば本当に良いところです。
苦労したことは、やはり経済面ですね。自分がはじめたころは丁度バブルがはじけた頃でした。
しばらくはスキー人口が多い状態が続き、２～３年は冬が忙しかったですが、その後、スキー人口も減ってしまい経営が大変になりました。
なかなか観光客も増えず、陸上合宿などのスポーツの合宿誘致にシフトしていきました。

●地域おこし協力隊への提案
みなさん外から来る人たちなので、新しい物の見方を取り入れて欲しいです。
何十年とここに住んでいる人は井の中の蛙のように見方が固まっています。
外から来た人の新鮮な目で見て欲しいです。例えば、白樺の木を見ても自分たちは木一本生えていると思うだけですが、外から来た人には違った見方があると思います。
外からの見え方と我々の見え方をうまく融合させて、何かできることを発案してもらえたら良いなと思います。そして、ここにある山や木といった自然にあるものを使って、年間通して続けられることを発見してもらいたいです。

●移住を希望する方へ
峰の原高原でペンションをはじめたいという人には観光客を相手にしようと思うと大変で

す。
自分は観光客メインにやっていないのでどれくらいお客が入るかわかりませんがスポーツ合宿メインでやると夏は盛況で冬は人口が少なくなったとはいえスキー客が入ります。
ただ、春と秋にお客がゼロになってしまうので工夫が必要だと思います。
スポーツ合宿に限らず、ペンション独自の特徴を出していかないといけないと思います。

ペンション ファンタイム
http://www.pensionfuntime.jp/
〒386-2211
長野県須坂市峰の原高原3153-862
TEL 0268-74-3033

（須坂市地域おこし協力隊　斉藤祐哉）

No67　「畑は子どもで主人は同士であり相棒」　／　須坂市地域おこし協力隊 成田あゆみの『豊洲フルーツハリウッド農ガール物語』vol.1

はじめまして。2017年6月から須坂市豊洲地区で活動している地域おこし協力隊の成田あゆみです。私が活動している豊洲地区は長野県でも有数の果樹地帯です。これから2か月に1度、豊洲地区の農家の男性と結婚し、県外からやってきて活躍する女性を紹介していきます。

第１回目にご紹介するのは、小島町に住んでいる依田菜穂子さんです。
菜穂子さんは東京都大田区出身で、実家は羽田空港の近くだそうです。
都会で暮らしていた女性がどうして豊洲地区へやってきたのか、そしてこれまでどんな暮らしをしてきたのかをお聞きました。

●夢は教師、好きになった人は農家

そもそものきっかけは、ご主人との出会いでした。同じ大学で同じサークル、活動する班が一緒で付き合い始めたそうです。

実は菜穂子さん、教師を目指していました。しかし結婚を意識した時に、ご主人の実家が農家だったこともあり、教師ではなく農家としてこの人と一緒に生きていこうと決めたそうです。

菜穂子さんのご両親も最初は反対をしたそうですが、きちんと説得して最後は祝福されて豊洲に嫁いできました。

●学生時代の人脈を生かし直接販売をはじめる

依田さんご夫婦は早い段階から農協を通さない直接販売を始めていました。

手書きのパンフレットを作成し、年3回ほど果樹の状況を顧客の皆さんにお知らせするようにしたそうです。

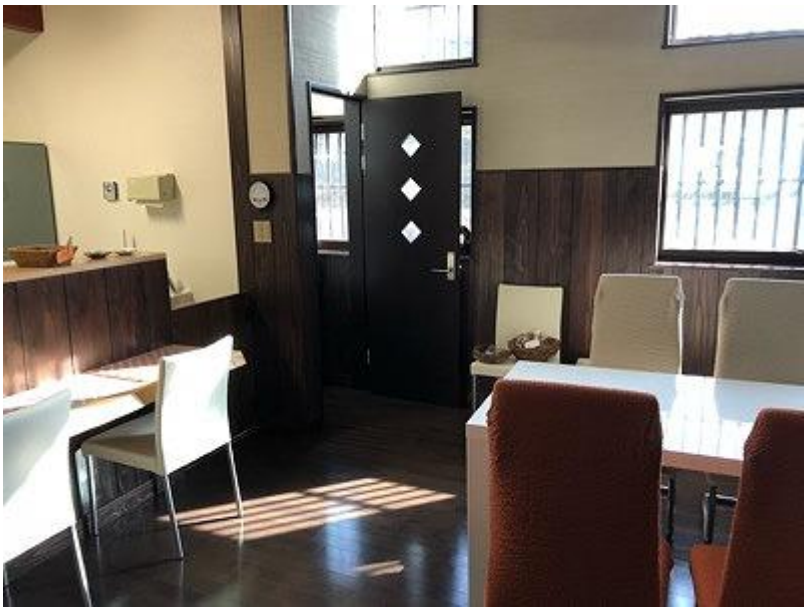
「東京に住んでいたころの人脈を生かし、販路を拡大していきました。当時の時代の流れにうまく乗れたおかげで軌道に乗り、顧客も1000件まで増えた」そうです。

「現在も取り引きして下さる方を大切に、直接販売を続けています。直接販売の利点はお客さんの声を直接聞けることです」と菜穂子さんはおっしゃいます。

「充実感を得られるし、何よりこのアイディアは県外出身者の強みを生かせることができたので嬉しかった」とのこと。手書きのパンフレットも好評です。
これまで農家をしてきたことで菜穂子さんは何かを作り出す仕事が自分に合っていたことが分かったといいます。
「教師になるより農家になってよかった」と語る菜緒子さんの笑顔が印象的でした。

●笑顔と元気いっぱいの菜穂子さん、農家のお嫁さんで大変なことありましたか？
「よそから嫁いでくるんだから、農家じゃなくてもいろいろあるよ」最初は一人の時間がないことに慣れなかったという菜緒子さん。
家族で専業農家だったこともあり家族と24時間一緒なのが大変だったそうです。
農業は初めてなことばかりで、家族や周りの方に教えてもらいながら解決してきましたが、それよりも跡取りの子どもが授からなかったことが一番の悩みだったそうです。
ご家族は理解があり不妊治療を支えてくれてとても献身的でしたが、「子どもはまだ？」と周囲に聞かれるたびに、悪気はないとわかっていてもねと菜穂子さんでした。
そんな経験もあり、より一層農業に力を注ぐようになったそうです。
「畑は頑張った分だけ返ってくるし、家族経営だから責任は重いけどその分自分の好きにできる。主人と２人で子どもの代わりに畑を育てているようなものだった」と話してくれました。
ご主人は同士で相棒なんだそうです。素敵ですね。

●夢であったカフェをオープン
菜穂子さんは現在、農閑期である１月～３月に土日限定で自身の夢だった古民家カフェを開いています。
老後を見据え体力のあるうちに始めたいと思い4年前に「古民家カフェよだや」をオープンしました。
現在は、地域にコミュニティの場を提供し、また冬の寒さに安らぎを与えるカフェとなっています。
私も今年の冬、地域コミュニティを学ぶ研修でお手伝いさせていただきました。
何人かで連れ立ってくる方もいましたが、１人で来てカウンターに座って菜穂子さんとおしゃべりする方もいて、そんな人が１人、２人と来て、そのうち知らない人同士で話が盛り上がっていました。
それがなんだか良い雰囲気で居心地が良い空間だなと思いました。
「先のことはわからないけれど、地域のお年寄りが気軽に立ち寄れる憩いの場になればうれしい」と菜穂子さんはおっしゃっていました。



●さいごに

菜穂子さんのお話は以上です。いかがでしたでしょうか？菜穂子さんがとても生き生きとしていて、まぶしく感じました。自分の仕事に誇りを持っていて、良いものを作り出すためなら努力を惜しまないとても行動力のある楽しい方でした。

次回もそんな豊洲地区で活躍する農家の女性のお話を紹介したいと思います。

（須坂市地域おこし協力隊　成田あゆみ）

No68　「遊歩道の整備！緋の滝に行こう！」　／　須坂市地域おこし協力隊 古川広野の『ただいま！峰の原高原』Vol.1

はじめまして、2018年4月から須坂市峰の原高原で活動をしております地域おこし協力隊の古川広野（こうや）です。
私は須坂市峰の原高原出身です。2018年3月に福岡の大学を卒業し、地元に帰ってきました。
Uターンしてきたという立場である私の目線も含めて、峰の原高原のことを皆さんにお伝えしていきたいと思います。

●峰の原高原の「MiNe」と「緋の滝」
峰の原高原にはMiNe（マイン）という団体があります。
MiNeは、峰の原高原の山野草をはじめとする自然や、景観などを保全する活動を主に行っている有志の団体です。
私もこの団体の活動をお手伝いさせていただきました。今回はその内容についてご紹介します。

みなさん、「緋の滝（ひのたき）」という場所はご存知でしょうか。
峰の原高原スキー場駐車場の下方で岩場を流れ落ちる、とても美しい滝です。
春にはカタクリやニリンソウなどの花も多く咲き、遊歩道を歩く人が増えてきます。
MiNeでは緋の滝へ向かう遊歩道の整備を行いました。
「遊歩道の整備」といっても、大きな重機を入れたりはできませんしたくさんお金をかけられるわけでもありません。
地元の人たちの手作業で少しずつ少しずつ、歩きやすいように整備していくわけです。
ではどういった整備をするのか。単純に「整備」の一言ではわかりませんよね。
私がお手伝いさせていただいた体験から、その内容を紹介したいと思います。

●遊歩道整備！
春、雪が解けて間もなくのことです。私は遊歩道を歩き、緋の滝へ向かってみました。
この時の遊歩道は、ほとんどカラマツの枯れ枝で埋まっていたり、日陰の部分は雪が残っていたり、たくさんのミズナラの葉っぱで埋まっていたり、土が流れてきて傾いていたり…要するに、歩きにくい！という状況でした。
来てくださる方が少しでも歩きやすいようにするためにも、こういった問題を一つ一つ解決していきます。
下見の時にチェックした、修復が必要な場所を目指します。歩きながら枯れ枝をどかし、ミズナラの葉っぱを履き、ようやく地面が出てきます。
土がたまって傾いてしまっているところは、周りを彫ったり、あるいは土をのせたりしてなんとか平らにしていきます。階段ももちろん手作りです。
木は現地調達してのこぎりで切り分け、鉈（なた）で先をとがらせて杭を作り、掛矢という大きな木槌で支えになる杭を打ち、階段のステップとなる横木を埋めて、実際に上り下りしてみて問題がなければ完成です。
急な坂道に新しく階段を加えたり古くなったものを取り替えたりしました。
私がやったのは全体から見たら本当に少しだけでしたが、なかなか大変な作業でした。
かつて道がなかった場所に、長い時間をかけて一人で遊歩道を作った超人のような人もいたそうです。本当にすごいです。
それを考えると私が手伝ったほんの少しの作業なんて大したことはないのかもしれません。
それでもしっかり筋肉痛になりました。日頃の運動の大事さを身にしみてわかるとともに、峰の原高原の人たちの強さを感じました。

●おわりに

遊歩道を歩く度に、山は違う姿を見せてくれます。少し前はカタクリやニリンソウが元気に咲いていました。
今の時期は新緑が素晴らしく綺麗ですね。カラマツの新芽はとても可愛いんですよ。
現代社会で生きているとなかなか自然の中を歩く機会は少ないかもしれません。たまには自然を満喫してみてはいかがでしょうか。
森にはたくさんの生き物がいます。中には熊さんもいますので行くときは複数名で、歌でも歌いながら行くのがおすすめですよ。
ぜひ峰の原高原の緋の滝にお越しください。

（須坂市地域おこし協力隊　古川広野）

No70　Erste Liedeのオーナー木村信貴さん　／　先輩移住者に聞くVol.14「須坂市峰の原高原ペンションオーナー」

みなさんこんにちは。このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどういうものか、須坂のいいところ、苦労しているところを聞いていくコーナーです。
今回は須坂市峰の原高原地区のペンションのひとつ、昨シーズンからペンションErste Liede(エアステ　リーベ)のオーナーをはじめた木村信貴さんにお話を伺いしました。
◆2017年12月に福井県から奥さんとお子さん2人（小5、5歳）と移住

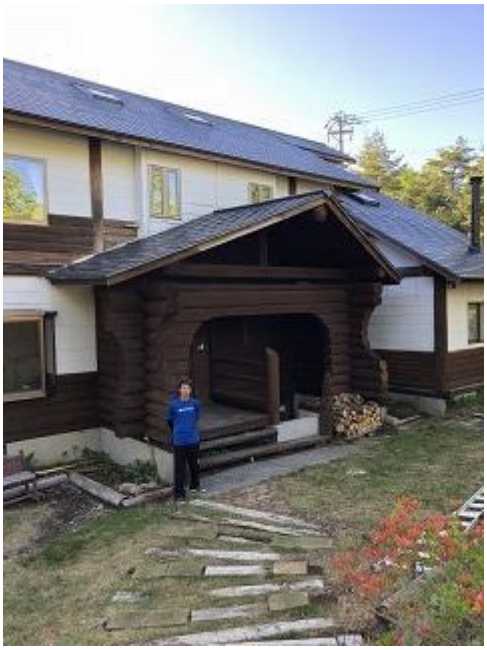
●ペンションオーナーになったきっかけ
これまでは10年間、隣の菅平高原に冬場の3ヵ月だけスキーのインストラクターとして働き、夏は地元の福井に戻りゴルフ場で働く生活をしていました。
その後、結婚もしたし、子供もできたのでスキーをやめるか、続けるかの選択を迫られることになりました。考えた結果、スキーを続けようと思い、続けるならどういった形で続けられるのか、ずっと考えていました。
ひとつは地元福井のスキー場で働くか、もう一つは峰の原高原に住むという選択です。菅平高原で働いていたので、峰の原高原の人たちとも親交がありました。ですので、こっちに来てみようかと相談したところ、たくさんの人が話を聞いてくれて、空きペンションを紹介して下さったり、ゴルフ場で働いてもいいじゃないかとかいろいろアドバイスをいただいたりしました。
最終的に峰の原高原に住むという選択をしました。
思ったより独立心が高かったのか、ゴルフ場で働くのは面白くないなと思い、それならせっかく峰の原高原住むなら自分でペンションをし、冬はスキーをするという生活をしたいと思ったのがきっかけです。

●須坂・峰の原高原で来て良かったこと、苦労したこと
峰の原高原は時間がゆっくり流れているところが良いですね。
ここに来る前までスキーをするのにも時間もお金もかかっていました。
朝6時から夕方5時までゴルフ場で働いて夜6時からバイトをするようなてんてこ舞いな生活でした。
ここに住んでからはゆっくり自分のペースで時間を使えるのが良いですね。
また、前から知っていた人はもちろん、来てから知り合った人もペンションの改修やペンションの仕事などでたくさん手伝っていただきました。そういうあたたかいところも良いですね。
逆に大変だったのは前のオーナーさんがペンションの管理が適当だったのか結構直すところが多く時間もかかっています。

●須坂市・地域おこしへの提案
協力隊にはもうちょっと峰の原高原の細かい情報を知っていてもらいたいですね。
どこが空きペンションで、どこのペンションが売りに出されているのかを把握してもらいたいです。
たとえば、今住んでいるペンションを売りたいという人がいて移住を希望する人とその人

で直接売買交渉ができる架け橋かなんかがあれば良いですね。
須坂市に対しては移住してくる人に対して補助金をもうちょっと出してあげた方がいいと思います。
自分はペンションを開くので、店舗を開店するのに出される補助金を使うことができたのですが、これがもし店舗を開かず、ただ住むだけだったら大変だと思います。

●移住を希望する方へ「絶対後悔しない場所」
来たいと思ったら来た方がいいと思います。
どういった仕事があるのかと思いますが、来れば何かしらの仕事はできるので、例えば菅平もそうですし、冬の仕事もそうですし、ペンションやるやらないに限らず、須坂や上田で仕事するにしろ来ようと思ったら来てみて少しの間泊まってみるとかしたほうがいいと思います。
もし、いきなり来て住むとしても峰の原高原は絶対後悔しない場所だと思います。



（須坂市地域おこし協力隊　斉藤祐哉）

No71　「おばあちゃんの言うとおり」　／　須坂市地域おこし協力隊 成田あゆみの『豊洲フルーツハリウッド農ガール物語』vol.2

こんにちは。2017年6月から須坂市豊洲地区で活動している地域おこし協力隊の成田あゆみです。
私が活動している豊洲地区は長野県でも有数の果樹地帯です。
豊洲地区に嫁ぎ農家となって活躍する魅力的な女性を紹介します。
今回は、須坂市小河原町に住んでいる丸山希代子さんにお話を聞きました。

希代子さんは長野市出身で、ご実家は市街地であめ工場を営んでいたそうです。
同じ長野県とは言え、農業に全く携わったことのない女性が、どのようにして暮らしてきたのでしょうか?
そもそものきっかけは、やはりご主人との出会いでした。
会社員として勤めていたころに友人の紹介で知り合ったそうで、当時はご主人も会社勤めをしていたため、ごく普通のサラリーマンだと思っていました。
しかし、お付き合いをしているうちに、ご主人の実家が農家で、ゆくゆくは後を継ぐということを知りました。
そんなとき、ふと希代子さんの脳裏に「農家の嫁になれば幸せになれる」という祖母の言葉がよぎったそうです。希代子さん自身も農家に興味を持っていたこともあり、ご主人と結婚して豊洲地域にある小河原町へと嫁いでくることになったのです。

●農家に嫁いで苦労したこと、驚いたことはありますか？
結婚してすぐに長男を授かり、またその後続けて２人目、３人目も生まれたため、しばらくは農作業に携わることはなかったそうです。そのため、当時は大きな生活の変化はなく、特に何か苦労したという記憶はないそうです。
ただ、嫁いできて驚いたのは家族の畑での作業時間がとても長いということで、朝早くから夜は暗くなるまで作業していることに、こんなに働くのかと衝撃を受けたといいます。
さらにその後、長男が２歳の秋に来た台風で強風が吹き荒れ、畑のりんごがたくさん落ちてしまったときのことが忘れられないそうです。
その後も強風被害はあったけど、あの時が初めての被害だったということもあり、大きく育ったりんごが無残にも地面に落ちているのを見た時の衝撃が忘れられないといいます。
これが、農家なんだと、どんなに家族で丹精込めて作っても気候次第で収穫出来なくなることもあるんだと、その時に農家の大変さを実感したそうです。
その後育児が一段落したのを機に農作業に参加するようになりました。そうして農作業に深く携わるようになると、今度は土づくりやりんごの摘果などの作業が難しく、それらを覚えるのには苦労したそうです。

●農家に嫁いで楽しかったこと
希代子さんは、自分が実は農作業が好きだということに、嫁いできて気づいたといいます。
子どもたちと過ごす時間も大切で大好きだけと、同じくらい農作業も楽しいのだそうです。
「体が２つあればどちらも楽しめるのに」と残念そうに言っていたのが、なんだかかわいらしくて印象的でした。
現在は義両親が農業を引退したので、旦那さんと２人での作業で、畑もたくさんあって忙しいけれど、やっぱり楽しいのだといいます。
「おばあちゃんの言うとおり、農家に嫁いで幸せ」だそうです。

●今後は何をしたいですか?
現在、一部の販路を直接販売にしているそうですが、数年後お子さんが成長しゆとりができたらこれを広げていき、他にも産直やりんご狩りもやりたいといいます。
今ある直接販売の販路は以前少しやっていたりんご狩りのお客さんから広がった顧客だそうです。
長くお付き合いのある方ばかりだそうで、忌憚のない意見も頂けると言い、とても大切になさっています。
やはり直接やり取りすることで得られる満足感は何ものにも代えがたいのだそうです。
そして、果物が好きな子供たちのために安心して食べられる果物をこれからも作り続けていきたいそうです。

これで希代子さんのお話は終わりです。いかがでしたでしょうか？
年下の私が年上の女性に対してこんなことをいうのは失礼かもしれませんが、とてもかわ

いい人だなと思いました。

次回も豊洲で活躍する素敵な女性農家さんを紹介したいと思います。

（須坂市地域おこし協力隊　成田あゆみ）

No72　「草原を作ろう！」に参加して　／　須坂市地域おこし協力隊 古川広野の『ただいま！峰の原高原』Vol.2

皆さんこんにちは。須坂市峰の原高原地域おこし協力隊の古川です。
この記事では、私の峰の原高原での活動を通して、その魅力を皆さんに伝えていきたいと思います。

●イベントたくさん！峰の原高原
さて皆さん、峰の原高原では、1年の中で多くのイベントがあることを知っていますか？
ゴルフコンペ、プリンスオープンテニストーナメント、高原食堂、草原をつくろう。星空ミーティング、SUZAKA-Yonako falls SKY RACE、きのこ祭り、お菓子パーティ、槍に刺さる夕日撮影会などなど、楽しそうなイベントが盛りだくさんです！
それぞれがどんなイベントなのかを全部書いているとそれだけで終わってしまいますので、ぜひ峰の原高原観光協会のホームページをご覧ください。
ここでは最近あったイベント、「草原をつくろう！」について紹介したいと思います。

●草原をつくろう！
7月1日（日）に第4回目となる「草原をつくろう！」というイベントがありました。
このイベントでは、峰の原高原スキー場にある一部ゲレンデの草刈りや外来種の引き抜きを行い、失われつつある在来山野草の草原を保全することを目的としています。

草原とは、「草に覆われ、木がほとんどないような場所」と定義されています。さて皆さん、草原って身近にありますか？少し考えてみてください。「身近に草原があるよ」という人は少ないのではないでしょうか。日本の地理的条件や気候などを考えると、国内において草原は貴重な環境だそうです。そこでスキー場なのです。夏のスキー場に行ったことのある人はあまりいないかもしれませんが、冬にスキーのコースになっている場所は木が生えていないことは分かると思います。そうです、スキー場のコースこそが、草原となり得る場所だったのです。もちろん手入れはちゃんとしなければいけませんが。
峰の原高原は標高1500mという場所にあります。冬の厳しい寒さもそのためです。こうし

た環境の山野草は、須坂市街では見られないようなものが多いです。その中にはツキヌキソウやヤマシャクヤクといった貴重なものもあるんです。「草原をつくろう！」は、なんとかして夏場のスキー場を草原にし、貴重な植物を守っていこうという思いで始まりました。

このイベントでススキ刈りなどの作業を行う場所では、もともとスキー場の管理会社が植物の種が熟す前に一斉に草刈りをしていたため、徐々に植物の数が減っていってしまったそうです。貴重な植物もあるのに、これではまずい！ということで立ち上がったのが前回私の記事で紹介したMiNeの皆さんです。「自分たちの手で草刈りをするので、一部の場所だけは管理会社で草刈りをせずに残しておいてくれないか」とお願いしたわけです。これが「草原をつくろう！」のはじまりでした。自分たちの手で草刈りをすることで、毎年少しずつではありましたが、峰の原高原の在来山野草は増えていきました。しかし今度は、自分たちで遅い時期に草刈りをしていたら、その時期に強いススキが増えてきてしまったのです。これではススキが在来の山野草に勝ち、山野草はまた減ってしまいます。というわけでススキ刈りも行っています。こうして現在のイベント、「草原をつくろう！」につながっているのです。

イベント当日は、写真家兼音楽家のいがりまさしさんをお招きし、講演会と草刈りを行いました。いがりさんはウラジオストクの草原と日本の草原の比較や、貴重な植物の分布などについて話し、その中で峰の原高原は貴重な植物も多く、珍しい環境であることを教えてくれました。そして、このイベントのような草原保護の活動の重要性を説いてくださいました。お昼にはペンションのオーナーさんの手作りカレーを食べ、午後は写真撮影ワークショップです。なんとスマホのカメラでも参加可能でした。それぞれが持っているカメラについて簡単な設定方法から教えていただき、「この花はこういう色なので背景はこうしたらいい。この角度からとるとこう見えるから、こうする」などといったように、プロの目線で写真の撮り方も丁寧に教えてくださいました。最後には縦笛演奏のミニライブも行われ、天候にも恵まれた充実したイベントになりました。

9月2日（日）には、今回草刈りをした成果を見るイベントがあります。秋の山野草やお花の観察会です。ガイドもつきますので、気軽に参加してみてください。詳しくはホームページをご覧ください。
今回「草原をつくろう！」のイベントでは記念品としてポストカードと木製のしおりを希望者に差し上げました。しおりは私が作りました。ヒノキを加工したものなのですが、これは須坂市の技術情報センターにあるレーザー加工機を使用し、作成しました。このほか、プリンスオープンテニストーナメントの時も参加賞としてキーホルダーを作成しました。現在、様々なオリジナルグッズを企画、検討中です。峰の原高原に来てくれた方に少しでも思い出に残るようなものができれば、と考えています。

●終わりに
「草原をつくろう！」のほかにも、今年もまだまだイベントがあります。みなさんもぜひ峰の原高原に来てみてください。
次のイベントは8月11日の星空ミーティングです。標高1500mから見る星空は圧巻ですよ！涼しい峰の原高原で星空を見た後はペンションに宿泊し、夏の一日を涼しくゆったりと過ごすというのもおすすめです。峰の原高原の様子はホームページやTwitter(@minenohara)、Facebook(峰の原高原観光協会)、Instagram(suzaka_minenohara)などで見ることができます。興味のある方はぜひ一度覗いてみてください。

（須坂市地域おこし協力隊　古川広野）

No73　ワイナリーへの就職と移住の夢が叶いました　　／　＜移住者インタビュー＞岩崎正知さん「須坂市で夢だったワイナリーへ就職しました」

須坂市亀倉の楠ワイナリーで働く岩崎正知さん（45歳）は、夢だったワイナリーへの就職を果たし、2018年3月にご夫婦で東京から須坂市に移住してきました。現在、楠ワイナリーでショップ運営や営業部門を主に担当し、ソムリエの経験を活かしながら働いています。
須坂市に移住するまでの経緯や現在の仕事、須坂市の暮らしについて話を聞きました。

●ワインの仕事を目指すことになったきっかけ
「大学時代から、いつか自分の店を持ちたいという夢を持っていました。もともとお酒が好きだったこともありますが、ただ「好き」ではなく、作り手のポリシーが感じられるお酒が好きでした。大学卒業後、ビアホールを中心に全国展開する総合レストランチェーンに就職し、その後もバーテンダーやカフェなど飲食店で店長や支配人などの経験を積みました。スコットランドのウイスキー蒸留所を見学し刺激を受け「物を作る」ということに興味が湧き、転職を機にフランスやイタリアで１ヶ月間ほどワインについて学びました。もっとワインについて深く知りたいと思ったのが、現在の仕事に結びつく大きなきっかけになりました」

●長野県産のワインに惹かれて

「ワインの産地といえば山梨県か長野県かなと思っていました。山梨県勝沼にはワインの飲み比べが出来て学べる場所があったので定期的に行っていました。しかし、ぶどう品種特性の表現方向にブレを感じたり、自分が求めるスタイルとの違いを感じていました。その後、長野県が地元で生産・製造されたものだけを認定する原産地呼称管理制度を成立させたことを知り、ワインに対する意識の高さに注目するようになりました。長野県内でも北信のワインを口にした時、その味に惹かれ、この地域の特性が出ていると認識しました。ワインの素地があり、今後発展していく可能性を強く感じる場所になりました」

●移住を考え始めたきっかけ

「2011年の東日本大震災を機に東京での暮らしに不安を感じるようになりました。ワイン作りに対して夢を持ち始めたのと同時に生活への不安を感じ始めたことで「移住」というものを考えるようになりました。特に40歳を過ぎてから体力的な不安を感じるようになりました。仕事に関しては、ソムリエとして勤務し従業員をとりまとめ、売り上げも毎年更新するなど順調でした。その半面、終電で帰宅し睡眠時間は平均5時間という生活でストレスがあったのも事実です。そんな生活を繰り返していた42歳の時、勤務中に倒れ病院へ運ばれてしまいました。これを機に本格的に移住を考え、いつ職場を辞めてもいいように態

勢を整えながら仕事をしていました」

●夢だったワイナリーへの就職

「東京有楽町駅前のふるさと回帰支援センターで山梨県と長野県それぞれの相談カウンターで移住先を探し始めました。それまでの経過からワインを通して長野県への思いが強かったことや、長野県の相談員から頻繁に連絡をもらっていたことが移住に向いた要因の一つでした。最初は北信2か所のワイナリーを希望しましたが、応募を受け付けていなかったり、自分のスキルが活かせる内容ではなかったため足踏みの状態が続きました。須坂市にも好きなワインを作るワイナリーがあるので、銀座ＮＡＧＡＮＯで行われていた須坂市移住個別相談会に参加しました。相談を通じて楠ワイナリーを紹介され、社長との面談の機会を得たことで採用へと繋がりました」

●楠ワイナリーでの仕事や須坂市での暮らし

「得意先まわりは初めての経験です。勤め始めて5ケ月ほどになりますが、とにかく今は新しい仕事に慣れる時間を過ごしていると思っています。これまでの職場では営業を受ける側だったので、今は逆に当時を参考にしています。楠ワイナリーの評判を良くするのも悪くするのも自分の対応にかかっていると思います。大学が工学部出身である楠社長の深い研究心が美味しいワインを作り出しています。お客様から楠さんのワインは美味しいねという言葉が聞けた時は嬉しいです。そういう声が聞けるワイナリーで働けることに、とても誇りを感じているし身が引き締まる思いです。今まで楠社長が築き上げてきたものを根底に、ソムリエとして身につけたスキルを活かしながら、美味しいワインを広めていきたいです」

「須坂市は出身地である埼玉県入間市の風景と近いものがあって、最初から全然違和感がありませんでした。違いといえば入間市にはなかった雄大な山々が望めることです。市街地にスーパーが多いですね。身近な食料品など買い物環境はそろっているので困ることはありません。大好きな野菜も新鮮で安いです。須坂市のスーパーで売られている見切り品を見て、東京で見ていた見切り品とは比べものにならないくらい質が良くて驚きました」

●移住を希望する方へメッセージ

「移住を希望しているみなさんに声を大にして言いたいことは、もし移住を迷っているのであれば、その機を逃さないでほしいということです。移住しようと思ったら行動に移すことが大事。私は病気で倒れたことが移住を真剣に考える引き金になりました。移住を目指しながらも迷っている人は、自分の体が健康なうちに行動に移してほしいですね。移住せずに今のままでいるのか、それとも移住にチャレンジするのか、どちらが本当のリスクを伴うのかを考えて選択すればいいと思います。私は移住をせずに東京に住み続けるリスクのほうが高いと思いました。なので移住へのためらいは一切ありませんでした」

＜左：楠社長＞

「来店したお客様にワインの説明をしたり事務全般を担当してくれたり、よく働いてくれています」とコメントしてくれました。

●おわりに

銀座ＮＡＧＡＮＯでの移住相談会後、岩崎さんからメールで「先程、楠社長から採用の連絡をいただきました。2018年3月1日から勤務開始予定です」という知らせを受けました。そのメールを見た時は、思わず「わぁっ」と言ってしまい、まるで自分の夢が叶ったようで嬉しかったのを覚えています。このあともアパートが決まりましたとトントン拍子に準備を進める知らせをいただく度にとても頼もしく感じました。今回移住に至るまでのお話を伺いましたが「とにかく美味しいワインを作る場所に就職したかった」と当時の思いを話してくれました。岩崎さんは過去も未来も考えず、ひたすら目的に向かって行動し、その結果、念願だったワイナリーへの就職と移住の夢が叶いました。雄大な自然の景色を目にしながら須坂市の美味しいワインを広めていってほしいと願うばかりです。

2018年7月取材

（須坂市移住・定住アドバイザー　豊田貴子）

No74　ペンションハーフトーンのオーナー長瀬 聡さん　／　須坂市地域おこし協力隊の斎藤祐哉が先輩移住者に聞くVol.15「須坂市峰の原高原ペンションオーナー」

みなさんこんにちは。このコーナーでは須坂市に移住した先輩移住者にインタビューをして、須坂の暮らしはどういうものか、須坂のいいところ、苦労しているところを聞いていくコーナーです。
今回は須坂市峰の原高原地区のペンションのひとつ、ペンションハーフトーンの二代目オーナーの長瀬聡さんにお話をお伺いしました。
◆2003年に埼玉県入間市から家族5人で移住

●ペンションオーナーになったきっかけ
埼玉県入間市の叔母は叔父に先立たれて一人暮らしをすることになり、それを機に一緒に暮らそうと考えました。ただ、都会でのマンション暮らしも家族みんなが働きに出てしまうため、結局一人を残す生活になってしまします。とはいうものの、老人ホームに預けるのは嫌だったので、みんなで商売を始めようということになりペンション業を始めました。

●須坂・峰の原高原で来て良かったこと、苦労したこと
ここに来て良かったことは空気がおいしいことと自分で好きなように仕事ができるということがいいですね。自分はスノーボードが好きなので近くにスキー場がある環境も良いですね。スノーボードがきっかけで奥さんとも出会えたし、たくさん仲間ができました。
苦労は今もしていますね(笑)。もっと稼ぎたい気持ちがあるのですが、自分はあまり体が

丈夫ではないので、できるだけ苦労を感じないようにしています。

●須坂市・地域おこしへの提案

とにかく今の峰の原高原はマンパワーが減ってきています。ですので、人口を増やす対策を考えてくれたらと思います。三世代いる家族に税制優遇なんかがあればいいのかなと思います。そういったことをすると人口が増えたり、住みやすい条件になり人が集まりやすくなったりするかと思います。

また協力隊には住んでいると気づきにくい良いところがたくさんあると思います。そこをどんどん発信していってほしいし、それに対してどんどん積極的に動いて行ってほしいです。

●移住を希望する方へ

峰の原高原でペンションを始めるなら若いうちが良いと思います。峰の原高原の魅力は何といってもペンションと景色だと思います。特に６月は、峰の原高原が芽吹く時季のグレーがかった緑の景色が好きです。

春夏秋冬それぞれ一週間ずつ峰の原に来てみると、その良さが分かると思います。良いところ、悪いところ、賑わっている峰の原、閑散としている峰の原を感じてください。

（須坂市地域おこし協力隊　　斉藤祐哉）

No75　「仲間を作る大切さ」　　／　須坂市地域おこし協力隊 成田あゆみの『豊洲フルーツハリウッド農ガール物語』vol.3

こんにちは。2017年6月から須坂市豊洲地区で活動している地域おこし協力隊の成田あゆみです。
私が活動している豊洲地区は長野県でも有数の果樹地帯です。
そこで、豊洲地区に嫁ぎ農家となって活躍する魅力的な女性を紹介します。
今回は、須坂市新田町に住んでいる森山裕香さんにお話を聞きました。

●農家なら一緒にいる時間が多い

裕香さんは香川県の出身だそうです。裕香さんのお父さんは銀行員をしていて仕事が忙しく、裕香さんが子供の頃はすれ違いの生活が多くありました。そのため、もし結婚するのなら一緒にいる時間を取れる人がいいな、といった漠然とした理想があったといいます。
裕香さんは、大学卒業後に参加した国際農友会の海外研修のための事前研修会で、実家が果樹農家のため勉強のため参加していたご主人と知り合いました。帰国後、岡山で開催された同期会で意気投合し、気の合う友人同士になったそうです。その後、裕香さんが長野へ旅行に来たのをきっかけにお付き合いをはじめ、3年間の交際を経て結婚しました。
実は結婚に至るまでの3年間、2人であったのは10回ほどだったそうです。本人いわく「一応恋愛結婚だけどお見合い結婚のようなもの」なんだとか。そうなるとどうやって結婚を決意したのかが気になり、聞いてみたところ「農家なら、一緒にいる時間が多いと思ったから」が決め手だそうです。

●仕事を覚え、町を知り、仲間が出来た
結婚して子どもが生まれ、農業と育児、家事ととても忙しく過ごしました。
農業と育児はもちろん、実家暮らしが長かったので家事も未経験のことが多く、覚えるのに一生懸命で1日が過ぎるのが早く感じたそうです。
ただ、覚えることを苦労と感じたことはなく、農業に関して言えば、仕事を急かされたこともなく、出来なくて当たり前、覚えられるまでやれば良いと言われたそうです。
それよりも、見ず知らずの土地に来たことで、知人や友人もおらず、町の若妻会や家族との話題についていけなかったことがとても寂しかったそうです。
だからより一層仕事を覚え、町の行事などにも積極的に関わっていったそうです。
そうしていくうちに少しずつ話せる仕事を覚え、町のことを知り、仲間が出来たそうです。
こうして聞いていると、裕香さんのもともとの性格もあると思いますが、苦労を苦労と感じず、明るく楽しく過ごしたいという思いが伝わってきました。

●時間をやりくりして気分転換
農家生活にも慣れ、子育ても一段落すると、裕香さんは「農家って時間を自由に決めて使えるんだ」ということに気付いたそうです。
そのため、本人は出稼ぎとおっしゃっていましたが、整骨院や他の農家さんのところへパートに出たり、時間をやりくりして気分転換のお出かけなんかもできるようになったそうです。
お酒を飲むのが好きなので夜によく飲みに出かけたそうで、適度に息抜きもできるようになりました。

●家族には言えないことも仲間になら吐き出せる
見ず知らずの土地へ最初はご主人だけを頼りにやってきた裕香さんですが、同じ町の方や農家の方々と長い時間をかけて交流してきました。

そのおかげで、今では心強い仲間が出来たといいます。辛い時や苦しい時は助け合い、楽しいことや嬉しいことは共有できる、家族には言えない愚痴も仲間になら吐き出せるし自分も話を聞くことができる。農家同士のつながりのなかで支えあうこともできる。そんな仲間がいることが幸せ。
もし、これから農家を目指す人がいたら、「まずは仲間を作ること」そんなアドバイスをしたいそうです。

以上が森山裕香さんのお話です。いかがでしたでしょうか。
これまで取材させていただいた方にも言えることですが、自分の仕事に誇りや自信を持って取り組んでいる方は笑顔が綺麗で、月並みな言葉になりますが、本当に輝いているなと感じました。
次回も、そんな輝いている方を紹介したいと思います。

（須坂市地域おこし協力隊　成田あゆみ）

No76　「峰の原高原とキキョウ」　／　須坂市地域おこし協力隊 古川広野の『ただいま！峰の原高原』Vol.3

皆さんこんにちは。須坂市峰の原高原地域おこし協力隊の古川です。
この記事では、私の峰の原高原での活動を通して、その魅力を皆さんに伝えていきたいと思います。

●夏の峰の原高原
気づけばもう9月です。気温も徐々に下がってきて、峰の原高原では朝と夜は寒いくらいの日が多くなってきました。確実に秋の気配が近づいていますね。
さて、峰の原高原の夏はどんな様子だったのでしょうか。峰の原高原では、昔から夏はテニスやゴルフのお客さんで賑わっていたのですが、近年は陸上の合宿で来ている人たちがとても多いです。
今年は7月に、峰の原高原のクロスカントリーコースがリニューアルオープンしました。今までのランニングコースに加えて全天候型の2kmコースも新設され、多くのランナー達が走ったことでしょう。多くのペンションが夏に合宿の受け入れをしています。峰の原高原では夏が一番活気にあふれているように思えます。

峰の原高原は標高1500メートルということもあって、涼みに来ている人がたくさんいました。気温は須坂市街から10度以上違うこともあります。木陰はとても涼しく、快適に過ごすことができます。今年はそうした木陰に自立式ハンモックを数台設置しました。その近くには小さな本棚を。試験的に設置したものだったのですが、多くの人が利用してくださいました。
高原でハンモックに揺られながら親子で絵本を読んでいるというような心温まる風景も見ることができました。

●峰の原高原のキキョウ
それでは今更ですが本題です。
秋の七草のひとつとしても有名なキキョウ。実はこの花、長野県版レッドリストでは準絶滅危惧種（NT）に指定されている植物なんです。

準絶滅危惧種というのは、「今のところ絶滅する危険はそんなにないけど環境の変化とかによって将来的に絶滅する可能性が結構あるよ！」というような植物です。詳しくは環境省のホームページなどに記載してありますのでご覧ください。
とにかく、こういった種を守るためには現状の環境の保全が大切になるわけです。
峰の原高原は今やかなり貴重な場所となったキキョウの群生地になっています。そんなキキョウなのですが、今年は峰の原高原でとれた種からキキョウを育てた苗を販売してみました。販売方法は無人販売。苗とお金入れるところをテーブルに置いておくだけの超簡易的なものです。下手をすれば苗もお金も持って行かれてしまうようなものでした。利益ではなく話題作りを目的としていたので、どっちにころんでも面白いだろうと言うことでの企画でした。苗だけ持って行かれても仕方ないだろうし、私個人の予想としては、売り上げは設定金額の半分も行けば良い方だろうなと思っていました。夏の間、およそ１か月で55株の苗が売れました。一株200円で販売していたので、計算上は11,000円の売り上げです。果たして、その売り上げは9616円と10シリングでした。思っていたよりマイナスが少なかったです。
内訳はわかりませんが500円程度。1円玉やシリング通貨などが入っているのは募金感覚で入れてくださったのでしょうか。
とにかく買っていただいた皆さん、ありがとうございます。
峰の原高原に来る人はいい人がたくさんいるようです。この記事を読んでいただいている方の中にももしかしたらキキョウを購入してくれた方がいるかもしれませんね。ありがとうございました！

●おわりに

峰の原高原にはキキョウのほかにも貴重な植物は少なくないです。
こういった環境を守るためにも、峰の原高原では様々な自然環境保護活動が行われています。
前回の記事でも触れたイベント「草原をつくろう！」もそのひとつです。
地元の人たちでがんばって、綺麗な花や貴重な植物を守っているのです。その甲斐あってか、今年もゲレンデにはたくさんの花が咲いていました。
現在ではマツムシソウやワレモコウといった秋の花が多く咲いていたり、種を付け始めた植物があったりと、また違った趣となっています。
四季を通して様々な表情が楽しめる草原は峰の原高原の大きな魅力の一つです。夏の花の様子を見逃してしまった方はぜひ来年峰の原に来てみてはいかがですか？

（須坂市地域おこし協力隊　古川広野）

No77　「念願だった長野移住を果たして」　／　須坂市地域おこし協力隊 早川航紀の『原点回帰の長野移住』vol.1

初めまして、2018年8月から須坂市の須坂温泉古城荘にて活動しております、地域おこし協力隊の早川航紀（はやかわこうき　27歳）です。
念願だった長野移住を果たし、あっという間に2か月が経ちました。
今回は自己紹介を兼ねて須坂移住をしてみての感想をお伝えできればと思います。

●移住のキッカケ
私の故郷は長野県の木曽郡という同じ長野でも南の地域でした。
須坂市よりもずっと田舎の山育ちだった私はありがちな「都会に出たい」という理由もあり、東京の大学に進学しました。
都会生活も日々刺激的で充実しておりましたが、就職活動の際にやはり大好きな地元長野県に貢献したいという想いから長野県に本社がある企業に就職しました。
すると、配属先はなんと東京。気持ちとしては長野に住みながら長野に貢献したいと葛藤しながら4年間東京で働いていましたが、「話を聞くだけ」と思って参加した移住セミナーの日から、気持ちはもう長野移住に向かっておりました。

●久しぶりの田舎生活。待ち受けていたものは・・・
元々田舎育ちで狭いところが嫌いということもあり、活動拠点である須坂温泉古城荘の近くの古民家に希望して住むことになりました。
都会生活にかぶれて今流行りの古民家リノベーションをして、スローライフを送る…そんな淡い期待に浮かれていた私を待ち受けていたのはなんと「ハクビシン」。
入居早々休みの日は屋根裏に入り、ハクビシン対策をするという日々がしばらく続きました…他にも庭の草刈り、家の修繕、2か月経った今日でも毎日やらねばならぬ事、やりたい事が山ほどあります！

●身体の変化
東京の独り身生活は朝満員電車にゆられ、夜仕事が終わり、赤ちょうちんに誘われて一日を労う、そんな毎日を送っていました。
大学時代から増えた体重は約5kg。須坂市ではもちろん車中心の生活。
自然とお酒の量も減り、温泉に浸かり、いただいた「おすそわけ」の野菜をもりもり食べる、うって変わって健康的な生活に変わり、なんと2か月で5kg痩せました！

体調不良の日が多かった私も、移住後は毎日快調に暮らしております。

●須坂温泉古城荘にて地域おこし

昭和36年創業という長い歴史をもつ温泉旅館「須坂温泉古城荘」は、宿泊だけでなく日帰り入浴もできるため須坂市内外のお客様に利用いただいております。
今後厨房を増設したり、日帰り温泉利用客の皆様の為に休憩所をつくったりと大規模なリニューアルの予定もあります。
まずは地域の人に愛され、市外県外から「須坂温泉古城荘に泊まる為に須坂に来た」と言っていただけるようなそんな温泉旅館を目指して、日々フロント業務から仲居さん、送迎バスの運転手まで何でも屋さんとして仕事を覚えています。
ゆくゆくは長野県を代表する健康長寿発信拠点にしたいと新たな取り組みにもチャレンジしていきたいです。

●移住を考えている方々へ

私が移住にあたって大切にしていることは地域の慣習を楽しもう、新しい人とのつながりを楽しもうということです。
地域の人達からしたらいきなり来たよそ者に警戒するのは当たり前だと思います。こちらから積極的に関わることでたくさんの出会いと学びがあります。
私もまだたったの2か月しかおりませんが、地域と地域の人と関わることで耳よりな情報が手に入ったり（田舎の口コミはネットより重宝します）、新しい発見があったりと良いことだらけです。住みやすい環境は自分から作ることができると実感しております。
「お世話さん！」の挨拶が飛び交う須坂を私は早くも第二の故郷のように感じています。

簡易バーベキュー＆ピザコンロ

（須坂市地域おこし協力隊　早川航紀）

No78　「地域おこし、はじめました」　／　須坂市地域おこし協力隊 宮島麻悠子の 『須坂おもしろ人物記』vol.1

はじめまして、2018年10月1日から須坂市役所商業観光課所属の地域おこし協力隊として活動をはじめました宮島麻悠子（みやじままゆこ・36歳）です。
9月下旬に須坂に移住してきたばかりですが、地域おこし協力隊の仕事のこと、移住して感じたことなどをお伝えしたいと思います。

●経歴を簡単に紹介します
デザイン系の専門学校を卒業後、アパレル店舗の内装設計の仕事を4年間した後、かねてから希望していたオーストラリアへのワーキングホリデーへ。
色々な地域を旅しながらリゾートホテルや農園などで働きました。
そこでは10代の若い子が農業の仕事をするのはあたりまえ、東京に比べると格段にお店や遊ぶ場所が少ない中で皆楽しく暮らしているのを目の当たりにして、こういう生き方があるのかと衝撃を受けました。
そんな中でだんだん地域おこしの仕事に興味を持ち始めていましたが、東京にいるとそういった仕事に携わる機会がなかったこと、企画立案し実行する経験がほとんど無かったこ

とからセールスプロモーションの制作会社に転職し、それらの経験を積むことにしました。

●移住を決めたきっかけ

結婚して長男も生まれ、育休から職場に復帰し、毎日慌ただしい生活を送っていました。
毎日帰宅は早くても夜7時すぎ、子どもを寝かせられるのは夜10時すぎ、主人の帰宅も毎日遅く、常にクタクタ。当然休日も遊びに連れ出す気力はなく、病院めぐりと平日できない家事をこなすだけで終わってしまっていました。
また、以前住んでいた地域は保育園激戦区な上に治安もあまり良くなく、ついでに空気も悪く、そのうち「この先もずっとこんな生活で幸せなんだろうか？」と疑問を持つようになっていき、移住に興味を持ち始めていきました。
主人が須坂市出身だったため、移住するなら須坂市とほぼ決めていました。
東京で開催していた須坂市移住個別相談会に参加し移住体験ツアーで企業を紹介してもらい、晴れて就職も内定をもらえたため移住を決断しました。

●移住して感動したこと

途中転園でも保育園に空きがある！
通勤時間が短い！
空が広い！
野菜果物がすごくおいしい！
人がおもしろい（笑）！

●地域おこし協力隊としての活動

まずは須坂のことを知るため、街なかのお店へごあいさつに伺ったり、視察や会合に同席させていただいて情報収集をしています。
100年以上の歴史を持つ老舗の方から、最近須坂で商いを始めた方にもお話を聞いているのですが、それぞれ色々な考えをお持ちで大変刺激になります。
そして、みなさん個性的で本当に面白いです！
また、蔵の街並みや美術館などの公共施設を訪れて、須坂のPRネタを探しています。
その他、空き店舗の利活用のため、空き店舗の貸し手と借り手をマッチングするサービス

の土台作りとして空き店舗の情報収集を始めています。

●個人的にツボな須坂のスポット

須坂クラシック美術館は空間としてもとても魅力的なのですが、階段のあしらいや格子などディテールに職人技が感じられて萌えます（笑）。
また、展示してある着物の色柄がとにかく可愛い！
たくさんのアンティーク着物が展示される「虫干し」は以前から気になっていたのですがまだ見に行けておらず、今秋の大虫干し会は絶対に見に行きたいと思っています！！
また、旧上高井郡役所の建物もミントグリーンの洋館風なのが珍しく、気に入っています。
今後も続々お気に入りスポットは増える予定です！

●今後の抱負

須坂で観光というと米子大瀑布などの山岳観光に力を入れてきたそうなのですが、歴史・文化的にもたくさん魅力があり、古い建物をリノベーションした個性的なお店もたくさん増えています。
こうした多様な魅力を発掘・発信し、地域が活性化されるよう尽力していきたいと思います！

今後、須坂の町にいるおもしろい人を紹介していこうと思います。
お楽しみに！

（須坂市地域おこし協力隊　宮島麻悠子）

移住者受け入れ協力求人企業に就職が決まり移住しています　／　信州須坂移住支援チームサポートによる移住者数が100人を超えました！

１　信州須坂移住支援チームサポートによる移住者数が100人を超えました！
２　都会のサラリーマンが田舎のサラリーマンになるための壁を壊す取組をスタート
３　この１年で「移住支援信州須坂モデル」を使って６組10人が田舎のサラリーマンに！
４　国家資格キャリアコンサルタントを配置しアフターフォローを強化
５　移住者が気軽に集える場所「移住者サロン」を開設します
詳細は以下をご覧ください

１ 移住支援チームサポートによる移住者数は100人を超えました

信州須坂移住支援チームサポートによる移住者数は、平成26年４月１日～今日現在（30年10月31日）まで累計103人となりました。総合戦略において平成31年度までの目標値を累計30人としていることから現時点ですでに目標値を上回る実績が出ております。
・26年度　11人
・27年度　15人
・28年度　25人
・29年度　34人
・30年度　18人（10/31現在）
累計１０３人

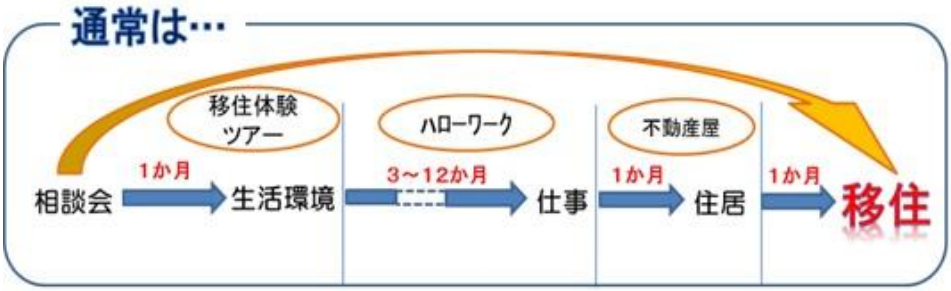
（1）26年度にチーム発足、積極的な情報発信を続けてきました
須坂市の移住定住を促進させるため、平成26年４月に政策推進課に信州須坂移住支援チームを設置し今年で５年目になります。まず、移住先としての知名度アップを図るため①東京や大阪、名古屋での移住相談会、②移住支援サイト、②メルマガ、③ブログ、④フェイスブック等で積極的に情報発信を行ってきました。

(2) 移住者の受け皿整備を行いました
移住希望者を積極的に受け入れるため①空き家バンク事業の充実　②移住体験ツアーの実施　③移住体験ハウスの整備　等を行い、移住者の受け皿の整備を行いました。

☆平成26年度～30年度（10月31日現在）実績
・メルマガ発行　毎月2回（5・20日発行）　登録1,147人
・空き家バンク　登録65件、成約50件　移住者45人
・移住相談会　85回400組591人参加　移住者36人
・移住体験ツアー　58回、78組141人参加　移住者32人
・移住体験ハウス　のべ107泊175人利用　移住者15人

2 都会のサラリーマンが地方のサラリーマンになるための壁を壊す取組をスタート

2017年（平成29年）６月からは、「移住支援信州須坂モデル」をスタートしました。これは、多くの移住希望者にとって移住先での仕事を重要視していることから、ハローワークと連携し、移住者の受け入れに協力的な企業を開拓しながら、移住希望者に対して、移住相談や移住体験ツアーを通し仕事や住居等をパッケージにして提供することで、移住希望者の不安の解消とスピーディーに移住へとつなげる仕組みです。



（１）「移住支援信州須坂モデル」の特徴

都会のサラリーマンが地方で仕事を探すことは至難の業。仕事を探し採用から就業まで２～３か月以上かかるため、通常の求人ではなかなか移住に結びつきません。移住定住アドバイザーが市内の求人企業を訪問し、移住希望者を受け入れてくれる企業を確保し、社長や従業員から話を聞き、求人企業の詳細を記事にまとめ、移住相談会やホームページで移住希望者に紹介しております。現在、移住者受入協力求人企業は製造業やサービス業、介護や食品関連など約22社まで増えてきました。

関連ページhttps://www.city.suzaka.nagano.jp/kurasuzaka/info.php?id=248

(2) 「移住支援信州須坂モデル」を使っての移住者
昨年８月に移住支援信州須坂モデル第１号で大阪から移住した40代の男性は、６月17日に大阪で開催の移住セミナーでお会いしました。７月１日に移住体験ツアーで須坂を訪れ求人企業と住居を見学。７月13日に移住を決め、８月16日に須坂市へ移住。８月21日から仕事をスタートしました。
また、10月に東京から移住した40代のご夫婦は、５月27日に東京の銀座ＮＡＧＡＮＯで開催した須坂市の個別相談会でお会いし、６月３日に求人企業と社宅を見学し７月１日に採用が決まりました。その後、東京での仕事を７月末で辞め、マンションを処分し、車の免許を取得後９月に移住。10月１日から就業を開始しました。

３ この１年で「移住支援信州須坂モデル」を使って６組10人が田舎のサラリーマンに！

(1) Ｉさん（40代・大阪府）
①就業先　製造業
②移住の理由　休職中で仕事を探すのと同時に地方移住を考えていた。
③移住までの経緯
・移住相談会（大阪）2017年6月
・移住体験ツアー　７月
・移住　8月
関連ページhttps://blog.suzaka.jp/ijushien/2017/09/06/p33830

(2)Ｋさん（40代・東京都）
①就業先　葬祭業
②移住の理由　終電に間に合わないほどの激務の日々で病気で倒れたこともあった。夫婦で山登りが好きだったので、長野県への移住を希望した。
③移住までの経緯
・移住相談会（東京）2017年5月
・移住体験ツアー 6月
・移住　10月
関連ページhttps://blog.suzaka.jp/ijushien/2017/11/20/p34238

(3)Ｉさん（40代・東京都）
①就業先　ワイナリー
②移住の理由　ソムリエの資格を活かしてワイナリーで働くのが夢だった。勤務中に病気で倒れたことが引き金になり元気なうちに移住しようと決めていた。
③移住までの経緯
・移住相談会（東京）2017年12月
・社長と面談　2018年1月
・移住　3月
関連ページhttps://blog.suzaka.jp/ijushien/2018/07/19/p35246

(4)Ｈさん（20代・東京都）
①就業先　温泉施設（地域おこし協力隊）
②移住の理由　もともと長野県木曽郡の出身。かねてから、地元の長野県に住みながら貢献したいという強い思いがあった。
③移住までの経緯
・移住相談会（東京）2018年2月
・現地説明会ツアー　2018年3月
・移住　8月
関連ページhttps://blog.suzaka.jp/ijushien/2018/10/05/p35559

(5)Ｍさん（30代・神奈川県）
①就業先
・ご主人　製造業　・奥さま　地域おこし協力隊
②移住の理由　お子さんを伸び伸び育てたいと考えるようになり、ご主人の地元須坂市へのUターンを機に夫婦で転職した。
③移住までの経緯
・移住相談会（東京）2018年4月
・移住体験ツアー、現地説明会　5月
・移住　10月
関連ページhttps://blog.suzaka.jp/ijushien/2018/10/22/p35616

(6)Ｏさん（30代・茨城県）
①就業先　きのこ栽培業者
②移住の理由　キノコが好きで栽培が盛んな長野県で就業したいと考えていた。
③移住までの経緯
・移住相談会（東京）2018年9月
・移住体験ツアー　9月
・移住　10月

４ 移住･定住アドバイザー(国家資格キャリアコンサルタント)を配置しアフターフォローを強化

信州須坂移住支援チームサポートによる移住者の増加に伴い、移住後の子育ての相談や奥様の就業の相談が増えてきました。そこで、29年４月からは移住・定住アドバイザー（キャリアコンサルタント）を配置し相談体制の強化を図るとともに、年２回移住者相談会を開催し11月からは月２回程度サロンを開設します。

５ 移住者が気軽に集える場所「移住者サロン」を開設します

年１回～２回程度移住者交流会を開催してきましたが、最近、移住者による仕事や住居に関する相談が個別で寄せられるようになってきたことから、移住者が気軽に相談できるサロンを11月から定期開催します。

(1)　開催日　毎月２回程度（平日１回、土日祝１回）
◆平日…18：00～21：00
◆土日祝…11：00～14：30
(2)　開催場所　常盤町の移住体験ハウス
(3)　11月の予定
①７日(水)18:00～21:00
②10日(土)11:00～14:30

今後の方向性
今後の移住支援の目指す方向性については、引き続き移住希望者の受け皿になる空き家バンクや仕事の確保を進め、移住支援信州須坂モデルを推進してまいります。移住相談会で

移住希望者のニーズを汲み取り、施策に反映させると共に、移住希望者に寄り添った対応をすることで、須坂市への移住定住を増やしていきたいと考えております。

No79　キノコ村に就職しました～幼い頃キノコ図鑑を見るのが大好きでした／　＜移住者インタビュー＞大島貴文さん「一念発起！やりがいを求めて転職し須坂市に移住しました」

●移住のきっかけ

「幼い頃、図鑑でキノコを見るのが大好きで何回も何回も繰り返し見ていました」そう話すのは、2018年9月に茨城県から須坂市に移住した大島貴文さん（31歳）です。
大島さんは、ずっと興味があったキノコの仕事に携わりたいと、須坂市亀倉にある株式会社キノコ村（現：信光工業株式会社キノコ村事業部）に転職し10月から働き始めました。
それまでは実家のある茨城県で10年間印刷会社に勤務し製本の仕事をしていました。30歳を迎えてから自分自身を振り返るようになり、このままこの仕事を本当に続けていくのかという疑問を持つと同時に、自分を変えたい、自然に触れる場所で仕事がしたいと思ったのが転職のきっかけでした。
これまで茨城県外に住んだことが無かった大島さんですが、一念発起し県外に出る決心をしたそうです。

「農業関係の求人サイトで探していたところ、キノコ村が目に留まりご縁を感じました。長野県はキノコの生産量日本一だと知っていましたし、キノコ村で栽培している種類の多さにも惹かれました。荒井社長に直接問い合わせたところ採用へと話が進み、信州須坂移住支援チームを紹介してもらい生活環境の案内や住居アパートの相談に乗ってもらいました。コインランドリーや比較的安いガソリンスタンドなど便利で役立つ情報も車で回りながら案内してもらいました」

●キノコ村での仕事

「就業して1ヶ月過ぎましたが仕事はとても楽しいです。今はキノコが育つ培地をつくる仕込み作業や殺菌を行う釜を担当しています。おがくずに栄養分となる材料を練りこむ工程があって、その材料を運ぶのは力仕事になります。さすがに最初の1週間は筋肉痛になりました。慣れてしまえば今は平気です。キノコは生物なので１＋１＝2ではなく、成長の仕方も様々なのがよく分かります。職場は、みんなマスクなど白い身支度のため顔が分からないのですが、動き方で誰なのかが分かるようになってきました」

「最近、歓迎会を開いてもらいました。キノコ村のフレンドリーでアットホームな雰囲気がとても良いです。荒井社長は今まで会ったことがないくらい温和な優しい方で、みんなが気軽に対応できる雰囲気を作ってくれています。自分は山登りが趣味なのですが、先日は職場の皆さんに誘ってもらい2,000メートル級の四阿山に登ってきました」

「日曜日休みが基本で、それ以外は土曜日か平日に休みがとれるので、すいている平日に観光地へ行ったりしています。前職は残業続きでプライベートな時間は無く会社と家との往復でした。今は残業もなく時間であがれるので最初は本当に帰っていいのだろうかとギャップを感じました。自分はお酒が好きなので、仕事が終わってからアパート近くのお店へ飲みにも行けますし、とても充実した生活を送っています」

●須坂市での生活

「正直、須坂市は知らなかったです。でも、山もあり町もあってアパートからも歩いてお店に行けて十分便利です。車でならスーパーマーケットも選び放題で、その日の気分で開拓しながら買い物をしています。市内を走る車はのんびりしています。あおられることも無く穏やかな気持ちで運転しています。以前住んでいた茨城県の実家は常磐自動車道が近かったため騒音が気になりましたが、須坂市の夜は静かでとてもいいです」

「農産物など食べ物が美味しいと思いました。おやきでは特に野沢菜が美味しかったです。プルーンやプラムなど、あまり見たことの無い果物もあって、どうやって食べるのかと思うほどたくさんの種類があります。黄色いシナノゴールドというリンゴは梨だと思って買ってしまったほど新たな発見でした」

●移住を希望する方へメッセージ

「案ずるより産むが易しで、迷っている時間があるならまず動いてみることだと思います。生活する場所として自分には①スーパーマーケットや買い物施設があること②家賃③交通の便が大事でした。須坂市は全部そろっていました。自分は独身なので仕事にやりがいを求めることに価値をおきました。１ヶ月ほどで仕事が決まりタイミングが本当に良かったです。キノコ村で雇っていただいたことに感謝していますし、誠心誠意尽くしたいと思っています。今後は、加工品など開発の提案にも関わってみたいですね。キノコ村の商品が須坂のイチオシになるよう広めていきたいです」

●荒井社長からのコメント

大島さんの担当業務は培地という大切な仕込み作業で、この部分を怠ったら良いキノコは育たないというくらい責任のある仕事をしてもらっています。大島さんはキノコに興味があったことが大きな強みでした。キノコを育てる際の観察力や気付き力があるので今後に期待しています。仕事へのやる気もあり性格も素直ですし、先日は信州須坂移住支援チーム主催の移住者交流会に参加してきたと嬉しそうに話してくれました。信州須坂移住支援チームの支援があって移住者の皆さんとも知り合えることができて良かったと思います。親戚も知り合いもいない須坂市で、彼にとって良いスタートが切れたのではないでしょうか。

●おわりに

大島さんは自分自身を振り返り、強い意思を持って仕事と移住を決意しました。信州須坂移住支援チームでは、一番最初に荒井社長から大島さんの移住におけるサポートについて相談を受けました。対応させていただく中で、大島さんは自分のやるべきことをしっかり理解できている方だと感じました。一見クールな大島さんですが、荒井社長がおっしゃるようにとても素直な心をお持ちです。そんな大島さんが育てるキノコは、きっと素直に成長しお客様に喜ばれる商品となって全国に旅立って行くことでしょう。

（須坂市移住・定住アドバイザー　豊田貴子）

No80　農業はクリエイティブ　／　須坂市地域おこし協力隊 成田あゆみの『豊洲フルーツハリウッド農ガール物語』vol.4

こんにちは。2017年6月から須坂市豊洲地区で活動している地域おこし協力隊の成田あゆみです。
私が活動している豊洲地区は長野県でも有数の果樹地帯です。
そこで、豊洲地区に嫁ぎ農家となって活躍する魅力的な女性を紹介します。
今回は豊洲地区に住んでいるAさん（匿名希望）にお話を聞きました。

●移住のきっかけは？
Aさんは東京生まれの東京育ちで就職も東京でしており、農業はおろか、長野県とは全くの無縁でした。そんなAさんが今のご主人と出会ったのもまた東京でした。
当時ご主人はモデルや役者の仕事をしていて、友人を介して出会ったそうです。
お付き合いが始まり、結婚を意識するようになってから実家が農家であること、いつか帰って農家を継ぎたい気持ちでいることを知りました。
当時のAさんは、服飾関係のモノを作り出すことに携わる仕事をしていました。
その職場の社長から「農業ってクリエイティブだよね」といわれ、目からウロコが落ちたそうです。「モノづくり」の根幹が同じなら誰にとっても必要な、「食べモノ」を作るのもよいかも知れないという気持ちになったそうです。
その後子どもが生まれ、職場への復帰を検討していた時期に諸事情が重なり、Aさんが想像していたよりはだいぶ早く長野へ来ることになったようです。
しかしその当時、ちょうど世間でも農業がブームになり、Aさんの周りでも就農や地方移住をする人がちらほら出ていたそうで、Aさん自身も実は農家にちょっと興味があったことも

相まって、すんなり一家３人で豊洲地区に移住してきました。

●実際に農家になって

実際に農業に携わるようになったのは３年ほどたってからだそうです。それまでは子育てに専念していて、そろそろ良いかなと思えたのがそれくらいの時期だったそうです。
畑に出てみてまず思ったことは、やはり「りんごがおいしい!!」だったそうです。
「畑でその場でもいで切ったりんごがすごい！切り口にストローさしたらそのまま飲めるんじゃないかというくらいジューシーでびっくり」したそうです。
畑で木からもいだ瞬間から鮮度が失われていくんだということを実感したそうです。
また、独身時代に携わっていた服飾の「モノづくり」よりも、「りんごづくり」の方が間口が広いことに気付いたそうです。
作ったものを食べてもらえるのはもちろん、体験をすることもできる、何より無駄が出ないことがとても嬉しいそうです。
あと不思議なことに、「体を壊した人の体はりんごを求める」と言います。Aさんがお世話になった会社の先輩で、癌で亡くなられた方がいたそうです。
その方は、胃を3分の2切除していてもりんごだけは最後まで食べることができたそうで、Aさんはりんごを求められたときは、その時の最高のものを送ったそうです。
そのときに「りんごって人間が生まれてから死ぬまでずっと食べられるモノ」なんだと感じたそうです。

●農業とは？

この質問にAさんは「私は農業を語るにはまだ経験も勉強も不足している」といいました。
それでも一言にすると「生活」だそうです。人の役に立っている、人が喜んでいるといった気持ちもあるけれど、やはり生産農家としては、生活するためにりんごを育てているのだといいます。
それでもその中に楽しさややりがいが出来たらよい、それには経験も勉強も不足してい

る、ということなんだそうです。今は言われたとおりに作業をやっているけれど、少しずつ自分で考えながら判断できるようになりたいといいます。
それともう一つ、気候のことも口にしていました。今年は３回も台風が来たのですが、これだけは対策のしようがない、神頼みであるとおっしゃっていました。
東京に住んでいたころはそこまで強く意識をしたことはなかったけれど、豊洲地区に来て気づいたのは祭りが多いこと。五穀豊穣を願う神事や祭事が人々の生活に寄り添っている、大切にされていると気づいたそうです。
Aさんも、台風の予報が出ると思わず神棚を拝んでしまうそうです。

Aさんのお話はこれで終わりです。いかがでしたか？
Aさんはなんとなく流れに乗ってきたんだとおっしゃっていましたが、それだけではない努力や苦労もあったと思います。私はそれを感じさせない明るいAさんが素敵だなと思いました。

（須坂市地域おこし協力隊　成田あゆみ）

No81　峰の原高原の冬　／　須坂市地域おこし協力隊 古川広野の『ただいま！峰の原高原』Vol.4

皆さんこんにちは。須坂市峰の原高原地域おこし協力隊の古川です。
この記事では、私の活動を通して、峰の原高原の魅力を皆さんに伝えていきたいと思います。

●冬
最近ようやく冬らしくなってきました。すっかり冷え込んできています。標高1500mの峰の原高原では雪が少しずつ積もってきました。すでにストーブやこたつを出している家庭も多いのではないでしょうか。外から帰ってきたときに家の中が暖かいというのはなんともいいものです。冬しか味わえない感覚。朝起きると部屋の中で息が白かったりします。

寒いです。本格的に冬ですね。

●峰の原高原スキー場

峰の原高原にはスキー場があります。須坂市の小学校出身者なら一度は来たことがあるという人も多いのではないでしょうか。峰の原高原のスキー場は今年から経営者が変わります。新しくなった峰の原高原スキー場は、12月22日（土）オープン予定です。オープン日は雪や気候などの状況で変更の可能性もありますので、詳しい情報は公式ホームページをご確認ください。

https://minenohararesort.com/ja/

フェイスブックのページもぜひご覧ください。

https://www.facebook.com/minenoharakogenresort/

スキー場も現在はオープンに向けて着々と準備を進めているようです。私は地元出身ということもあり、小さい頃から遊んできたスキー場が新しくなることにわくわくしています。スキー場関係者に話を聞くと、経営が変わっても峰の原高原スキー場はスキーヤーの皆さんもボーダーの皆さんも、子供から大人まで幅広く誰もが楽しむことができるスキー場にすると言ってくれました。レストラン内部も改装が進んでいます。ショップになる場所やレンタルのラックなど、木を使用したネイチャースタイルのものに生まれ変わっています。信州須坂フルーツエールを提供する場所もあるようです。なんだか楽しいスキー場になりそうです。今までとは少し雰囲気が変わった峰の原高原スキー場、ぜひ遊びに来てください！

改装されたレストランニレイの様子

高齢化が進んでいる峰の原高原。私と同じ20代はほとんどいなくて、50代以上のおじさんおばさん、おじいさん、おばあさんばかりのペンション村。そんな村に新しい風が吹いてきているわけです。少しずつではありますが、峰の原高原も変化していっています。これからの峰の原がどうなっていくのかがより楽しみですね。峰の原高原全体が一体となり同じ方向を向いて、よりよい地域になってほしいと想っています。そしてそんな地域を作っていく一人になれれば嬉しいです。

●峰の原高原スキー場への手紙

さて、現在「峰の原高原スキー場への手紙」を募集している企画があります。スキー場を訪れた時の思い出やこれからのことなど、たとえスキーをしていなくても、ゲレンデにまつわる内容であればどのようなものでも、誰に宛てたものでも構いません。例えば、スキー場関係者の人へ。例えば、昔一緒に滑った人へ。ペンションの人でもいいですし、スキー場やリフト、雪などを人と捉えて書いていただいても構いません。本当にどんなものでも結構です。みなさんの想いを、お便りにしてお寄せください。A4以下の用紙2枚以内（片面のみ）でお願いします。手書き、タイピング、便箋、ハガキなど形式は問いません。手紙を送っていただいた方の中から抽選で5名様に「峰の原高原 旅館組合加盟の宿1泊2食付き宿泊券」または「峰の原高原スキー場 1日券」のいずれかをお送りします。

◆応募期間：2018年11月20日（火）～2019年1月20日（日）

◆応募方法

・名前、年齢、住所、電話番号必ず明記してください。お手紙とは別の用紙に記入して同封していただいても構いません。

・入選作品を公開する際、お名前も合わせて記載いたします。ペンネームやイニシャル、匿名での公開を希望される方は、その旨と記載して良い形式のものを上の内容に加えてお書きください。

・お手紙は下記の住所まで郵送でお送りください。

〒386-2211

長野県須坂市大字仁礼 3153-885　P.スタートライン 内

峰の原高原観光協会　宛

・郵送のみでの受付となります。

より詳しい情報は峰の原高原観光協会のホームページをご覧ください。

https://www.minenohara.net/

https://blog.suzaka.jp/minenohara/2018/11/21/p35760

●おわりに

峰の原高原は長野市や須坂市と比べると大体５～10度くらい気温が低いことが多いです。すぐお隣の菅平高原は本州で最も低い気温、-29.2℃を記録したことがあります。そこより200mほど標高が高い場所が峰の原高原です。須坂市からは車で30分くらいすれば着きます。厳しい寒さを体験したい！という方にもおすすめです。冬は霧氷、夕陽、星空などな

ど、素敵な景色を見られる日も多いです。ぜひお越しくださいませ！

（須坂市地域おこし協力隊　古川広野）